



『注文の多い料理店』を読んで

猿楽小学校 四年一組 那須川 千花

私はいつもねる前にベッドで本を読んでいます。今日はどの本を読もうかまようのも楽しい時間です。『注文の多い料理店』は私がこれまで何度も読みかえた本の一つです。なぜ何度も読みたくなるかというと、りっぱな西洋づくりの料理店でどんなおいしい料理が食べられるのかとわくわくしながら読んでいくと、最後に自分達が料理されてしまうというおどろきの結末がとてもおもしろいと思ったからです。

りょうをしていたふたりが見つけた料理店の中には、なぜかたくさんの扉があり、一つ一つにおきやくへの注文が書かれています。私は半分くらい読んだところで「このままでは自分たちが料理されて、食べられてしまうよ。」と気付いてふたりに教えてあげたくまりました。しかしふたりはその注文を全て良い方に考えて注文通りにしたがっていきました。そして最後になってようやく自分たちが料理されるのに気付いてにげかえるのです。

私はレストランやカフェで食事するのが好きです。お家で食べるごはんもおいしいけれど外で食べるごはんはふんいきもちがうし、ふだんは食べない料理が出てきて、楽しい気分になるからです。ふたりはせっかくすてきな料理店に入ったのにまさか自分達が食べられそうになるなんてかわいそうだ

けれどありえなすぎておもしろいというのが最初の感想でした。

しかし、何度も読みかえすうちにその考えが変わってきてきました。私は人間が料理になってしまふなんておかしな話だと思っていました。それは本当におかしいのかよく分からなくなつたからです。人間も動物もみんな生き物で平等なのにいつも人間ばかりが動物を食べているのがなんだか不公平に思えたのです。ふたりは物語のはじめに「なんでもかまわなから早くタンタアーンと、やってみたいもんだなあ。」と言っていました。この言葉も動物の気持ちになつて考えるととてもひどくていやな言葉です。人間だけがえらそうに動物を殺したり、当たり前のように動物を食べていることがもうしわけのないような気持ちになりました。

料理されそうになつたふたりはあんまり心をいためたために、顔がくしゃくしゃの紙くずのようになり、東京へ帰つてももと通りにはなりません。最初はふたりがかわいそうだと思つていたけれど今はこのことがふたりの天ばつたのかなと思うようになりました。

私達は動物がかわいそうでも食べなければ生きていけないので毎日動物の命をいただいています。しかしそれを当たり前のことと思わずに「いつもありがとう。」という気持ちで感しゃしていただければふたりのようにくしゃくしゃの紙くずのような顔にならなくてすむのではないかと思うのです。